

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)  
 大学院生研究  
 2005 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	ドイツ文学	専攻			
指導教員	所属・職名		氏名					
	文学部ドイツ文学科		副島博彦 印					
自然・人文の別	自然	・	人文	個人・共同の別	個人	・	共同	名
研究課題名	交際を規範化するものとしての礼儀作法書の歴史的分析 - 『人間交際術』受容史の試み							
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年			氏名				
	文学研究科ドイツ文学専攻 博士課程後期課程3年			吉村 暁子 印				
研究組織	在籍研究科・専攻・学年			氏名				
	文学研究科ドイツ文学専攻 博士課程後期課程3年			吉村 暁子				
研究期間	2005		年度					
研究経費	200		千円					

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、人間の日常的文化的な営みとしての社交生活における主体の姿を、いわゆる大衆向けの交際や出世のためのハウツー本である実用書の記述から描き出そうとするものである。これまでドイツの啓蒙家クニッゲ著の『人間交際術』をとりあげ、同書のコンセプトを把握するべく研究を進めてきた。今後は19世紀ドイツにおける同書の受容史的な位置づけを試みるとともに近代日本についても同様の試みを行う予定である。特に公共の場で一定の規範に則って振る舞いを統制する主体の行為に注目して通時的に観察する。近代ドイツ語圏と日本の社交状況を比較し、近代的な主体の成立に際して礼儀作法や処世術とそれを説く実用書の機能について考察する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ クニッゲ受容 ] [ 交際のマニュアル化 ] [ 社交理論 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、ドイツ啓蒙主義時代の作家クニッゲ (Adolph Franz Friedrich Freiherr von Knigge, 1752-1796) の名が、そのもっとも広く読まれた著作である『人間交際術』 („Ueber den Umgang mit Menschen“, 1788) が受容される過程で、いかに「作法書」へと換喩化していったのか、またその現象の前提として、「ハウツーもの」として社会的相互行為の規範を提示する書物の系譜を辿り、それが文化的な感情・身体のコントロールとどのように関係し、現代社会に辿りついたかを明らかにすることを試みた。また、この試みを通じて、近代の啓蒙主義的自己規定が揺らぐ現代人の社会生活の在り方についての解釈を行った。『人間交際術』は、啓蒙主義思想に基づきながら人間があらゆる階級の人々といかに交際すべきかについて述べている。自分自身との付き合いから家族、友人、貴族、市民階級など交際相手を細かく分類しており、とくに交際の範囲に市民階級が含まれる点で注意に値する書物である。しかしさらに興味深いのは、この『人間交際術』の著者クニッゲの名が、現代ドイツ社会では実用的な知識の入門書を表す普通名詞的地位を獲得している点である。

とくに今年度においては、この著者クニッゲから「作法書 (クニッゲ)」への換喩化の現象を問題として取り扱う前提として、ヨーロッパにおいて社交的振る舞いを扱う書物である「社交書」 (Anstandsliteratur) の規定に注目した。「社交書」は、社交にまつわる感情の制御や社会的言語的状況の文化的発展の典拠、素材として、これまでさまざまな学問領域で扱われてきた。しかしそれは歴史的史料としての扱いであり、「社交書」そのものの特性や厳密な定義に取り組むものではなかった。そこで本研究では、わずかに K.-H. ゲッテルトと M. ベーツによって試みられた定義を検討し、またヨーロッパで「社交書」とされる書物の系譜をたどることによって、ここに二筋の流れを見出した。

『歴史的修辞学事典』におけるゲッテルトの規定によれば、「社交書」 (Anstandsliteratur) は、「社交における振る舞い、もしくは交際形式にとりくむ著作の総称」である。また「社交における振る舞いや交際形式」全般を題材として扱う著作がすべて含まれるということだから、「社交書」は、非常に大きな枠組みである。本稿は、「社交書」の広漠な領域のなかにふたつの流れを見出し、(1)倫理的な視点から社交の規範がどうあるべきかを論じることに重点が置かれる著作を「社交倫理書」 (gesellschaftsethische Literatur) と呼び、また他方で、(2)期待される社交の形式が具体的にいかなるものであるかに重点が置かれる著作を「作法書」 (How-to-behave-Buch) と呼んだ。この設定によって、ドイツに伝統的な内面的精神性の洗練を論じる「社交倫理書」と、社交の具体的な作業方法を提示する「作法書」の 2 つの系譜が考えられるようになる。もちろん「社交書」の系譜が、「社交倫理書」と「作法書」に厳密に分けられ、それぞれが一筋の線を進むように発展してきたと考えるわけではない。

さて「社交倫理書」は、「礼儀」、つまり「ある社会あるいは個々の社会層に成立しており、倫理道徳的に要求され期待される振る舞いに支えられた基準で、一般には「自明的に」感じられ、ある社会の成員が同じ社会の成員に対して行う「よき」「正しき」行為 (「振る舞い」) のための基準」を示すものと考えられる。また「作法書」は、「社交倫理書」に記された規準を具体的にいかにして成すか、その作業方法であるといえよう。よって前者において扱われる内容は普遍的善悪の問題であり、倫理的対象として論じられるけれども、後者は社会的時代状況によって変化する身体的美醜の評価の問題なのであって、道徳の問題として扱われるべきものではない。

したがって「社交倫理書」とは、「礼儀」、つまり社会的相互行為について論じている著作であり、「作法書」とは、文字通り「作法」、挨拶、食事、共同作業、訪問、会話、贈答、結婚など数々の日常的慣習的儀礼を具体的に実行する作業方法を記した著作なのである。そしてこのふたつの流れによって、「社交書」の系譜を眺めてみると、「作法書」の流れが、現代の「作法書 (クニッゲ)」へと結びついているということが言えるのではないかという仮説を立てたのである。

ここで行った「社交倫理書」における「礼儀」と、「作法書」における「作法」の区別は、社交の内容と形式の問題であると同時に、内面と外面の問題とも関わっている。とくに啓蒙主義の時代には、外面的な社交的振る舞いは人間の内面性を偽装するとして、厳しく批判された。外面に表現される行為が内面を必ずしも表さないという認識が、道徳的批判の対象となったのである。それはまた、ドイツに特徴的な理想的人間像にも由来する。人間存在の魂の発展と成熟を目指すドイツ的「文化」においては、外面的形式的に礼儀にかなった (zivilisiert) 振る舞いよりも、内面的に教養を身に付けた (gebildet, kultiviert) 人物として完全性を目指すことが要求され、それをもってよしとする伝統が受けつがれてきた。

**研究成果の概要 つづき**

またフランスでヴォルテールやルソーら啓蒙思想家たちによって議論された「自己愛」(amour-propre)の概念は、社交における「作法」が、利己的目的のために他者を欺く振る舞いであり、エゴイズム性の発揮であるとして批判されている。ここでの批判は、外面的形式としての「作法」が、誠実な「礼儀」を表現するためでなく、利己的目的のために利用され、結果として他者を欺いてしまうことに対するものである。功利的な目的のもとに用いられるこの場合の「作法」は、フランス啓蒙主義だけでなく、ドイツ的な文化の精神もまた相容れないものだった。それゆえに啓蒙主義時代における議論において、社交的振る舞いが道徳との関連で取り沙汰されるのは必然的なことであろう。

このような「礼儀」の背後関係に対して、外面的形式としての「作法」における問題は、道徳的な(moralisch)善悪にあるのではなく、むしろ慣習的な(sittlich)美醜にある。「作法」はあくまで身体的な行為である。ドイツ的なこの道徳的視点は、特定の功利的目的のために「作法」を行う身体の即物的制御性への反発、および内容を失って形骸化した形式としての「作法」への非難として表れてくるものである。それは人間の精神性に重きを置き、内面的道徳的完成を目指すドイツの啓蒙的伝統であり、「社交倫理の書」において議論されてきた問題なのである。

一方で社交の形式集である「作法書」という視点を、この「社交倫理の書」に対置させてみると、現代の「作法書(クニッゲ)」へ至る道筋が臆気ながら浮かび上がる。社交の具体的な作業方法である「作法」を記した書物という観点から、「社交書」の系譜を遡ってみると、弁論の「作法」、食卓の「作法」、儀礼的「作法」、手紙の「作法」、人付き合いの「作法」、というように、「作法」を扱う主に教育的な内容の書物が「作法書」にあたると思われる。

たとえばクインティリアヌスの『弁論家の教育』における弁論術の「作法」は、その後に絶対主義時代に成立する「儀礼の書」(Komplimentierbuch)に示される「話術」(Redekunst)へと引き継がれていくものであることは、M.ベーツも指摘しているところである。また『弁論家の教育』は、弁論家の教育書であると同時に、子どもの人生を手引きする(Lebensführung)ものでもあると述べている。この「手引き」の性質を引き継ぐかのように、14世紀から15世紀にかけては、著者は伝わらないままだが、子どもが身につけるべき「作法」や食卓での「作法」を扱う著作がフランスやイギリスを中心に多く現れてくる。人文主義時代のエラスムスの『少年礼儀作法論』を経て、その後宮廷社会の成立とともに、絶対主義時代の宮廷儀礼の書である「儀礼の書」が見出される。ボーゼの『書状・口頭儀礼各種厳選快適便覧』やロール(の『私人用儀式学入門』、ヴェヒトラの『実用手引き』)などがその例である。「儀礼の書」は「儀礼作法」(Komplimentierkunst)を記述しているものである。「儀礼の書」は今日では「お世辞」などの言語行為に関する意味合いが強く語であるが、絶対主義時代の宮廷文化においては、「礼儀正しさ」(Höflichkeit)を表現するためのさまざまな言語的・身体的基本形式を意味していた。

「作法」を記述する著作としての「作法書」の系譜はさらに受け継がれ、グラートの『手紙、ならびに手紙における良い趣味の実用的取り扱い』が著される。その後19世紀末まで間が空くが、1871年のドイツ統一以降は「よき振る舞い」(Der gute Ton)と題される一連の著作が後を引き継いでいく。そして「よき振る舞い」(Der gute Ton)と時代的に重なりを見せつつ、クニッゲの『人間交際術』を受容した現代の「作法書(クニッゲ)」が現れてくるのである。このようなわけで、社交書の系譜を、「作法書」と「社交倫理の書」、このふたつの流れに分けることによって、「作法書」の流れが、現代の「作法書(クニッゲ)」へと結びついているということが言えるのである。

しかし今後の課題となるのは、クニッゲの『人間交際術』それ自体は、必ずしも「作法書」の系譜に属していないと思われることである。『人間交際術』に描かれているのは確かに「作法」なのだが、「倫理道徳的に要求され期待される振る舞いに支えられた基準」でもあると考えられるからである。クニッゲの『人間交際術』がこの点において特異であることを確認し、「社交書」の系譜を描き出した点をもって今年度の研究とする。

今後は、「作法書」史におけるクニッゲおよび『人間交際術』の位置づけについて、啓蒙主義時代・19世紀のクニッゲ受容、20世紀初頭の「形式」を忌避する思想傾向と「社交書」の有り様を中心に研究を進めていく予定である。